

## 新刊紹介

淀川茂重氏著

## お星様からきいた話

私が二月の末日、雪の降る寒い夜、學校から空辨當といつしよに戻りましたら、落第せなんだら今度五年生になる内の小さい娘が、「東京の神田さんから下さつた本です。もうみんな読んで終ひました」と小さい可愛らしい四六版の百十七頁の、全部青文字の本を手渡しました。表題の様な名前で、一人の愛くるしいお子さんが、天の不思議を解かうと、親切なお星様に色々御尋ねした事がすつかり書いてあります。

其の夕飯が済んで後、火鉢に手を翳し、背巾を丸うして始から終ひまですらくと通讀しました。淀川さんは長野縣師範附屬小學校の先生だけあつて、子供によく解るやう、又よく興味を惹き起こさしめるやう、それはそれは骨を折つて書かれた形跡がありありと見えます。カントの星雲説が韻文になつて居るのは中々思ひつきです。そして中々又新らしい材料が遠慮なく使つてあります。二年前の白鳥座新星の事は「大空の事を本氣で調べて

あつしやる神田先生が、八月二十二日夜の月のやや低くなつた……」と其の發見の顛末を述べ、昨年の「地球と衝突するかも知れない」が、星雨を見るこゝが出来るとか言はれた」ウインツツケ彗星の事も出て居ります。誰でも聞きたがる七夕、天の川、彗星はちやんとありますから心配はないですが、お日様や、お月様や、赤い火星の上の生き物のお話などは著者が次の機會にせられるらしい様子です。兎に角内の子供が私より早く讀んだ所を見ますと随分面白いと云ふ事が解りますから、何でも見るにつれ、聞くに連れ、何でもに怪訝の眼を睨はり、限らない智識慾を満たさうとさなる世の中のお子さん方に勧めます(古川) (東京神田錦町三の二) 東洋出版社定価金三十錢)

## ハンガリー國だより

戦争前、ハンガリーには四つの天文臺があつたが、最近着の報によれば

一、ヘレニ天文臺 之れはゴタルト伯が一八一一年に設立したもので、十吋反射鏡を備へてゐた。伯の死後、諸設備は賣却された

二、キスカルタに天文臺 之れはゴドマニスキ男爵が建てたものであるが、一九一九年以來、過激派やルマニア人に掠奪されて今は廢墟となつた。

三、カロクサ天文臺 之れはイエスイト派の大學天文臺で、一八七八年ハイナルド僧止の設立したもので、七吋屈折鏡を持つてゐる太陽の觀測などをやつてゐたが、最近數年以來、財政困難で活動しなくなつた。

四、オギヤラ天文臺 唯一の國立天文臺で一八七一年設立、十吋の反射鏡及び屈折鏡等を有し、主に天體物理の研究をやつてゐた。パハ平和條約により此の天文臺の所在地はチエク國に編入されたので、職員一同は始め、どこまでもハンガリー天文臺として觀測を繼續したいと申出でたところ、大に虐待せられ、非常な壓迫の下に、研究不能になつてしまつた。

こゝにいふ状態で、ハンガリー國の天文臺は何れも逆境に立つて研究が停止してしまつたので、今般、新たに首府ブダペストの近くのスワベキイ(Szabeky)山上に國立天文臺を設立することにまつたといふ。